

近藤誠氏「『がんもどき批判』に思う」への回答

こう さき ご ろう
神前五郎

元大阪大学医学部第二外科教授
元日本外科学会会長

▶ KeyWord

科学とSFの棲み分け
癌幹細胞説
癌放置療法

▶ はじめに

本誌2013年11月2日号に掲載された拙稿「近藤誠氏の「がんもどき理論、癌放置療法についての考察」¹⁾に対して近藤氏からの反論²⁾が12月7日号に掲載された。しかし、そこにはいくつかの問題点があるので簡単に回答したい。

▶ 取り決め違反は近藤氏側からなされた

自然科学の進歩に乗って色々とSF(空想科学小説)が生まれるのは楽しい。しかし、SFが自然科学体系の変更を迫る事態になると、それは危うい。近藤氏の「がん二元論」(癌は本物の癌とがんもどきに分けられ、互いに移行することはない)は彼の恣意的な想念の産物であってSFそのものである。しかし、SFの枠を飛び越え、医学の進歩の成果の一つである「癌は早期に発見して、早期に治療するのが最も良い」という厳然たる事実を彼ががん二元論によって否定し、癌放置療法を広く世にすすめるようとしていることを知った。

そこで、がんもどき理論に対する反論を母

校の阪大外科学教室同窓会誌に投稿した上で近藤氏に送り、できれば科学者同士として対談し、科学とSFの棲み分けについて合意に達したいものだと考えた。その準備を既に完了していた6月になって近藤氏の著作に関する検証記事が2週にわたって「週刊朝日」誌に掲載されたが、話は枝葉末節にとどまり、「がんもどき理論は成立しない」という命題が論じられておらず、それをもどかしく感じて編集部へ手紙を送った。その後、担当記者からのインタビューに私が応じ、近藤氏の理論に反対していることが報道された。そのためか、近藤氏とのコンタクトが取りにくく、反論の送付から対談の実現まで近藤氏と面識のある担当記者に仲介の労をとってもらった。対談は近藤氏が来阪する日の午前に決まった。

次に対談の条件として「余人を交えず二人だけで行う」ことを強く近藤氏から要求してきた。自然科学の対談で何故秘密にする必要があるのか私には分からなかった。ところが前もって私の了解を求めることもなく、対談当日、担当記者が近藤氏と相前後して私の入院していた病室を訪れた。記者も対談に立ち会い、対談の内容を記事にまとめ掲載した。

自ら強硬に主張した取り決めなるものを破ったのは近藤氏自身の側であることを、本論に入る前に指摘しておきたい。なお、同窓会誌や週刊朝日誌の記事に対する反響の中に、私が近藤氏の理論に反対する理由が分からないという声が医師の方々からもあった。そこで日本中の医師に知ってもらうために「日本医事新報」を選び、簡単に根拠とする事実を記したのが、本稿冒頭に記した考察¹⁾である。近藤氏の指摘する勝利宣言と受け取られるものではない。

▶ SFと自然科学の狭間で

近藤氏の著作「がん放置療法のすすめ」には癌外科医であった者として到底理解できない、言い換えれば虚偽だとしか考えられない記述がある。それは胃癌「ケース3」を記した文の一節である。詳細は本誌11月2日号¹⁾に述べたから略するが、それについての質問に対して、なるほどと了解しうる回答は得られなかった。前述の週刊誌上では、問題の本質をはぐらかして、まったく答えになっていない答えが載っている。もちろんこの文責は週刊誌記者にある。

癌は良性に近いものもあれば非常に悪性のものもある。良性のものが悪性のものにも変わることも多い。癌の増殖速度は早いものから遅いものまで千差万別である。胃を例にとると、癌は粘膜層で発生し、粘膜下層、固有筋層、漿膜下層へと向かって順に増殖していき、最後に漿膜に露出して腹膜播種を起こす。どの層まで進行したところで胃癌と診断され、治療が始まるかによって予後はほぼ決まる。すなわち、癌が発生してから見つかるまでの時間と、癌の性質が予後を決めるのである。このことは日本だけの経験ではなく、世界中の一致した見解であって、多くの症例の積み重ねによる事実である。

近藤氏はこれを「早期発見仮説」「後から転

移仮説」と言って認めない²⁾。科学的事実を否定するのであれば、がん検診のランダム化比較試験の数値より類推するという裏道ではなく、正々堂々正面から攻めて否定するべきであろう。

また、近藤氏は早期胃癌は手術を行わなくても、それが進行癌となって癌死に至ることはないと主張する。そして、早期癌を放置した結果、癌が進行して死に至ることを実際に見たという報告がないと一貫して述べている。しかし、大島ら³⁾は1982年、すでにその事そのものの観察を行ったことを私は本誌の考察¹⁾にも記したが、それに対する答えはその報告を無視することであった²⁾。その上、近藤氏は臨床家に医学を否定し、代わりの規範としてのがん二元論を率直に認めよ、と要請しているが、私は1人の医師として、医師の良心に従ってそれを拒否する。

▶ 癌幹細胞説と清水論文の価値

癌細胞集団にはそれぞれの癌幹細胞があって、その増殖によって癌細胞集団に発展してきたものであるという説があり、研究が行われている。オランダのCleversらは、マウス大腸正常幹細胞が一定条件下に癌化して癌幹細胞になる可能性を示している。

清水論文⁴⁾は、早期胃癌の高分化腺癌病巣内に小さい未分化癌病巣があって、細胞1個当たりのDNA量を測定してみると、その量のバラツキが激しい、すなわちより悪性の癌になっていることが分かった。こういう事実の積み重ねが自然科学の体系を作るのである。

癌幹細胞説が発展すれば、清水論文の意義を別の側面から明らかにしてくれるかも知れない。1つの考え方として、癌幹細胞は癌組織内に散在するのであろう。高分化腺癌の中に混在していた癌幹細胞が、それを取りまくniche(微小環境)に存在した発癌性ポテンシャルの下に突然変異を起こして、未分化型癌

幹細胞に変化し、その周りを未分化型癌細胞が取り巻くことになったのであろうか。いずれにしても近藤氏の「癌幹細胞に多分化能があることから、2つの組織型（高分化腺癌と低分化腺癌）が混在しても、癌が途中から悪性化したとはいえない。癌幹細胞を無視したために、神前論考はひとりよがりになってしまったと思われる」との本誌12月7日号17頁²⁾の論難はまったく当たらない。ある組織を作る細胞1個あたりのDNA量分布が正常より大きく偏倚するというのは、有糸分裂を舞台として染色体異常に始まり、染色体分離の異常に終わる現象の結果である。癌幹細胞の持つ多分化能は遺伝子発現のコントロールに関わることでまったく別の話である。近藤氏はこのことを十分認識せずに、多分化能で異常有糸分裂を説明しようとする無理な「こじつけ」を平然と行った。彼の自然科学に対する態度の1つの現れということか。

もちろん清水論文についての上記の癌幹細胞がらみの解釈は仮説である。胃・腸癌の癌幹細胞説そのものがまだ仮説の域を脱し切れていない。しかしいずれも自然科学の新しい発展分野であり、SFとは根本的に異なるものである。

▶ 新聞でも近藤理論が話題に

「近藤さんのがん放置療法でいいのか」あるいは「大丈夫か」という読者からの声を最近新聞が取り上げた。昨年12月15日の朝日新聞では、勝俣範之氏（日本医大）はがんもどき理論に明確に反対しているが、それはまた一部の患者に当てはまる仮説とも述べている。

同じく12月19日のオンライン版読売新聞コラムでは大津秀一氏（東邦医大）が「がんもどきを完全に否定する」「検診・早期治療をやっても日本人の全がん死亡率は下がって

ないという近藤氏の誤った主張は、年齢調整をしていない統計数値を使ったためのもので、これはおそらく本人自身はその主張の誤りを分っているはずだ」「早期胃痛を放置したとき患者の半数以上は胃癌死した（Tsukuma Hら、2000）という事実を認めようとしない」などと述べている。一般の人々にとって最も大切なことが正しく、しかも分かりやすく書かれていて一読に値する。

近藤氏の著作がベストセラーとなり、がんもどき理論は社会に浸透しつつある。医学界もこの問題の結論をはっきりさせて、社会全般に知ってもらおう努力をしなければならないだろう。

▶ 科学専門誌に発表を

多くの事実をもって裏づけされた自然科学の理論とSFとの論争は元来成り立たない。

文庫版「患者よ、がんを闘うな」のあとがきで近藤氏は、がんもどき理論は世界的にもオリジナルなもので、それを提供できたことを科学者の1人として誇りとしていると記した。本誌12月7日号²⁾では、それから20年、専門家たちとの多くの対決型対談を経て修正の必要がないことを示したという。しかし、それらの記録は複数のレフェリーのついた科学専門誌に掲載されていない。

今からでも遅くない。がん二元論（がんもどき理論）を十分な根拠となる事実とともに、科学専門誌に発表していただきたい。その上で、論争する機会があることを願っている。

● 文献

- 1) 神前五郎：日本医事新報．2013；4671：28-33.
- 2) 近藤 誠：日本医事新報．2013；4676：15-8.
- 3) 大島 明，他：病態生理．1982；1：921-6.
- 4) 清水 實：大阪大学医学雑誌．1977；29：473-89.